

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01928

研究課題名（和文）新自由主義・新保守主義下でのジェンダー再編の理論整理および日英韓比較研究

研究課題名（英文）International Comparable Study on the Ideological Restructuring of Gender Order by Neoliberal/Neoconservative regime in UK, Korea and Japan

研究代表者

細谷 実（Hosoya, Makoto）

関東学院大学・経営学部・教授

研究者番号：10209249

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：韓国では社会的地位を得た女性と草の根フェミニズムとの連携がうまくいかず、女性登用が保守主義・新自由主義への対抗となっていない。新自由主義の進展は、性役割やミソジニーを強化する一方、女性就業者を増加させ、就業機会をめぐる軍事主義と女性との新たな結びつき（ROTCなど）を生み出している。軍事主義的保守団体の女性運動家へのインタビューにおいては、民族主義以上に反共主義が強調されていて、興味深い。

他方英国では、プア・ホワイトとも結びつくと言われる排外主義勢力と、エスタブリッシュ層を基盤とする新保守主義勢力とは、必ずしも一致していないが、労働党勢力と多元主義的価値観支持層との結びつきは強固である。

研究成果の概要（英文）：In Korea, the female political leaders are non-cooperative with the grassroots feminism movements and have little interest in their demands, therefore the current policy of increasing women in high social status do not lead either to reinforce feminism or to weaken conservatism and neoliberalism. While traditional gender role and misogyny tend to be more emphasized, some of Korean female employee, who is increasing under neoliberalism, appeal their experience of military service to get some advantage in job-hunting. Besides, it's noteworthy that anti-communism was insisted deeply more than Korean-reunification in the interview with one of female activist of the militaristic conservatism.

In UK, on the other hand, xenophobia is often prevailing among the 'poor-white', who are hostile to the neo-liberalists belonging to the ruling class. Such xenophobic 'poor white' do not support the Labour party, however the people who prefer cultural-pluralism are eager in supporting the Labour party.

研究分野：ジェンダー

キーワード：市場化 反共主義 伝統主義 家父長制 性別役割 排外主義 労働党 軍事主義

1. 研究開始当初の背景

新自由主義と新保守主義との同時代的展開がジェンダー再編にいかなる影響を及ぼしたかを検討する研究は、手付かずである。その一因として、そもそも新自由主義や新保守主義をどのような思想的・政治的ムーブメントととらえるのかに、諸議論で相違がある点が挙げられる。たとえば新保守主義を、軍事力を背景とした単独主義外交の主張ととらえる政治学の議論と、失業者や移民の増加などによる格差拡大から生まれた、権威主義的国家規律の回復要求を中心にとらえる社会学の議論とでは、新保守主義の主要な推進者・支持層を異なって把握するだけでなく、宗教右派との関係性をどう説明するかなど、様々な点で議論のすれ違いが生じる。

近年のバックラッシュ現象のイデオロギー的特徴を、女性の地位向上や性役割流動化への過去の反動現象の特徴と比較して考察する上で、このような新保守主義や新自由主義などの概念の混乱は、大きな障害となっている。しかもこの概念の混乱は、新保守主義や新自由主義が最初に台頭した70年代末イギリス社会を前提に議論するか、90年代以降のグローバル新自由主義経済やそれに包摂された2000年代日本社会を前提に議論するか、前提される社会の違いが明確に把握されていないことに起因するのではないかと考えられる。そのように考えれば、開発独裁的な政治・経済体制のままグローバル金融資本主義に組み込まれ、IMFによるショック・ドクトリン的新自由主義化を経験することになった韓国における新保守主義・新自由主義の展開とジェンダー再編への影響は、さらに異なったものとして捉え得るであろう。

以上のような問題意識から、世界各地が新自由主義経済にどのような地政学的位置からいかなる経済発展段階において組み込まれたのかに留意しつつ、新自由主義や新保守主義の概念整理をおこなった上で、新保守主義的ジェンダー再編の主張のイデオロギー的特徴について、あらためて研究する必要性があると考えたのが、研究開始の背景である。

2. 研究の目的

新自由主義経済の拡大は、女性の(有償)労働力化を促進する一方、伝統的家族主義の強調をも生むといわれる。新自由主義と新保守主義との矛盾をはらむ並行的展開がみられること自体は、これまでも指摘されてきた。だが、新自由主義化が引き起こす社会的変化は、世界経済システムにおけるそれぞれの地域の地政学的位置により異なるはずであり、さらには新自由主義化に並行して展開される保守的主張の内容も、地域により異なると考えられる。

本研究では、異なる経済発展段階と地政学的位置にあって新自由主義化を経験したイギリス・韓国・日本の三カ国において、それぞれどのような保守的主張の展開とジェン

ダー・イデオロギーの再編とが生じたのかについて、メディア分析や論壇誌の言説分析などから明らかにし、国際比較研究をおこなうことを目的とする。

3. 研究の方法

以下の3つの方法を柱として分析作業をおこなった。

【1】新自由主義・新保守主義・ジェンダー再編に関する国内外の先行研究を、政治学や労働経済学、(教育)社会学などの幅広い領域にわたって検討し、概念整理をおこなう。

【2】新自由主義・新保守主義的社会変化(特にジェンダー再編)に対する、どのような合意や対抗言説の形成が行われたのかを、イギリス・韓国・日本の三カ国のメディア分析や論壇誌の言説分析、知識人による新自由主義・新保守主義批判の理論分析、等で明らかにする。

【3】新自由主義・新保守主義とジェンダー再編との関係の研究に取り組みつつあるイギリス・韓国の研究機関(London School of Economics and Political Science Gender Institute など)や研究者と交流をして彼らの知見を参考にするとともに、今後の国際共同研究プロジェクトの組織基盤づくりをおこなう。

4. 研究成果

韓国にあっては、20世紀の終わりに福祉システム・福祉社会が未だ成立していない中で、IMF管理下において民主主義・非保守派政権による新自由主義化が進行した。これは、チリ・ピノチェト政権、サッチャー政権、小泉政権が保守政権であったことに照らして特異な事態であったと言える。

この韓国の新自由主義化は、一定の歴史的蓄積をもった福祉国家に対する新保守主義勢力による挑戦という側面を持った英国での新自由主義化のプロセスよりも、福祉国家が未成立であったにもかかわらず生じたという面においては、私企業による従業員福利厚生への依存度の高い福祉システムを発達させて、福祉国家が不在であった日本における新自由主義化と類似している。だが韓国における保守/非保守の区分は、北朝鮮に対する軍事的強硬主義と、それを支える反共産主義・伝統主義的保守勢力の存在抜きには考えられない。この勢力が主張する社会秩序、ナショナリズム、伝統的家族主義とどのような関係を新自由主義化は有したのか、分析が必要(チリのような、軍事主義と新自由主義の直截な結びつきとはどのような異同があるのか、等)である。

本研究では(1)ナ=イ・ユンギョン准教授(延世大学、ジェンダー研究・フェミニズム理論)への聞き取り調査(2)ジョン・ユソン教授(ソガン大学、男性学)への聞き取り調査(3)保守主義団体「ブルー・ユニオン」の女性運動家クォン・ユミ氏へ聞き

取り調査(4)韓国保守系団体「自由経済院」セミナーへの参加によるフィールド調査、等を通じ、(a)大統領制下の大胆な政策的介入により女性の社会的登用が急激に進む一方で、社会的地位を得た女性と草の根フェミニズム運動との連携がうまくいっておらず、女性登用が反保守主義・反新自由主義の有力な対抗ブロックを形成するに至っていない(b)新自由主義の進展による格差社会化が、「女性＝養教育役割 / 男性＝扶養役割」を一層強化し、また周縁化されることに脅威を感じる男性のミソジニーが強化されている状況がある(c)他方で、若年層における新自由主義への対抗・オルタナティブの模索も展開されている(d)保守主義団体の女性運動家の言説においては、民族主義以上に反共主義が保守主義・軍事主義と強く結びついて顕在化している(e)徴兵経験者に就職が有利になるなど軍事主義が資本制と結びつく中で、新自由主義化による女性就業者の増加が軍事主義と女性との新たな結びつき(ROTCなど)を生み出している、等のことを明らかにすることができた。

他方で英国については、福祉社会の解体(水準の切り下げ)・労働組合の弱体化、市場化・金融経済化、などが進行したが、サッチャーの伝統的家族賛美言説は、日本における所得税の配偶者控除のような具体的な政策化を、必ずしも伴わなかった。キリスト教保守主義が唱える理念の政策化も同様であり、その意味で新自由主義と伝統主義的保守主義とは、韓国や日本と比較しても距離がある。大陸ヨーロッパで拡大しているネオナチ的移民排斥運動は、英国では大陸と比較してむしろ押さえ込まれている(BREXITの成立はあったものの、その後 UKIP は大敗し、労働党が党勢を取り戻した)。

本研究では、(1) Mary Evans 教授(LSE: London School of Economics and Political Science, Gender Institute)への聞き取り調査(2) Phil Burton-Cartledge 研究員(ダービー大学)への聞き取り調査、等を通じ、(a)いわゆる「プア・ホワイト」「衰退製造業地域の労働者」としばしば結びつくと言われる、排外主義を掲げるいわゆる極右勢力と、エスタブリッシュ層を支持基盤とする保守党およびそのイデオロギーとしての新保守主義とは、イギリスの場合は必ずしも連携したり結びついていかない(前者は英国では、保守主義的な意味をもつ「右派(right)」としてよりも、むしろファシズム(全体主義)として捉えられている)、(b)労働組合を媒介とした労働党勢力と、ジェンダー・セクシュアリティ規範に対する自由主義も含む、多元主義的価値観の支持層との結びつきは強固なものがあり、近年の UKIP への急速な支持拡大に続く急落を理解するには、労働党に対する評価の変容を視野に入れる必要があること、等の知見を得た。

翻って日本では、働き方改革法案と家庭

教育支援法案制定が並行して進む動きにみられるように、新自由主義的な労働改革がジェンダー・セクシュアリティ規範における伝統主義・反多元主義的バックラッシュを正当化するという結びつき(「残業せず帰宅し、家庭で慕われる家父長としてふるまう」男性労働者像のイデオロギー機能)がみられる。

反新自由主義ではなく新自由主義への支示が、伝統的保守層の反多元主義な軍事主義と結びつくという点においては、日本は韓国に近いとも言えるが、この点については父親復権運動など具体的な運動局面における、新自由主義・新保守主義イデオロギーとジェンダー再編との関連性、あるいはアイデンティティ・ポリティクスなど多元主義を重要課題とした第三波以降のフェミニズムと、新自由主義イデオロギーとの関連、などの軸に沿って検証する必要があると考えられる。また、「衰退製造業地域の労働者」と排外主義との結びつきが英国に比べ相対的に弱い背景には、非熟練サービス業(小売店の販売員、飲食店等接客業に従事することに対する日本人若年男性の抵抗感の弱さも一因と考えられ、このような職業イメージと男らしさの関連の国による差異も、今後深く検証していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

千田有紀「増田レポート」を読む：「輝き」と「死」のはざままで、『ピープルズ・プラン』68巻、2015年

千田有紀「文化の中の子ども虐待 関係性としての虐待」『子どもの虐待とネグレクト』17巻1号、2015年

海妻径子「研究と実践は大学寄附講座の上で交叉するか? 米国の大学における男性学の制度化と文化支配」『現代思想』44巻21号、2016年

海妻径子「トランプ・ショック、あるいは「主体性ある女性保守」の反乱」『現代思想』45巻1号、2017年

細谷実「新自由主義の支配下で仕事について考える」『季報唯物論研究』140号、2017年

海妻径子「日本における女性保守政治家の軍事強硬主義とジェンダーの変容」『ジェンダー法研究』4号、2017年

海妻径子「フェミニズムの姉妹、保守とリベラルのキマイラ：軍事強硬主義的女性保守政治家の支持獲得構造とイメージ」『現代思想』46巻2号、2018年

〔学会発表〕(計1件)

海妻径子「日本における女性保守政治家の軍事強硬主義とジェンダーの変容」ジェンダー法学会、2017年

〔図書〕(計4件)

細谷実、中西新太郎、小園弥生『仕事と就職活動の教養講座』白澤社、2016年
小林富久子、村田晶子、弓削尚子、細谷実、他『ジェンダー研究/教育の深化のために早稲田からの発信』彩流社、2016年
菅原和孝、下條信輔、熊谷晋一郎、千葉雅也、門林岳史、千田有紀、赤川学、高谷幸、櫻村愛子、風間孝『身体と親密圏の変容(岩波講座 現代 第7巻)』岩波書店、2015年
吉見俊哉、千田有紀他『万博と沖縄返還1970年前後(ひとびとの精神史 第5巻)』岩波書店、2015年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細谷実(関東学院大学・経営学部・教授)
研究者番号：10209249

(2) 研究分担者

海妻径子(岩手大学・人文社会科学部・
准教授)
研究者番号：10422065

千田有紀(武蔵大学・社会学部・教授)
研究者番号：70323730

(3) 連携研究者

()
研究者番号：

(4) 研究協力者

高橋幸(武蔵大学ほか非常勤講師)
Rosa Lee(東京大学大学院総合文化研究
科)